

薫と浮舟の物語

—

大君を失った薫は、その死に顔を見ながら「かくながら、虫の殻のやうにても見るわざならましかば」(総角⑤三二九)との願いを抱く。伊藤博氏がこのあたりの叙述について、「あくまでも大君との「心」の交流を求めていたはずの薫が、ここに至って「心」なき肉体そのものにつよい執着を示していることに注意したい。大君の形代・人形を求めての薫の彷徨がすでに方向づけられていよう」と述べるように、薫は臨終直前の大君の発言「このとまりたまはむ人(＝中の君)を、同じことと思ひきこえたまへとほのめかしきこえしに」(総角⑤三二七)などを思い出しながら、匂宮と結び付けてしまった中の君に対して「形見にも見るべかりけるものを」(総角⑤三三〇)「かの御代りになすらへても見るべかりけるを」(総角⑤三四〇)との後悔の念を抱くようになる。そして、早蕨巻に入つてその中の君が大君に似ていることが指摘されてくるようになる、その思いはますます強まっていくのである。

一方の中の君も、大君を亡くした悲しみは深く、新春を迎えても

吉田幹生

いっこうに心の晴れる時がない。そして、「薫ガ」尽きせず思ひほれたまひて、新しき年とも言はずいやめになむなりたまへると聞きたまひても、げに、うちつけの心浅さにはものしたまはざりけりと、いとど、今ぞ、あはれも深く思ひ知らるる」(早蕨⑤三四七)と、自分同様に悲しみに沈む薫に対して共感の情を深めていくこととなる。薫は、そのような中の君の後見役に徹してあれこれと世話をするのだが、早蕨巻巻末に至ると、中の君は「わが御心にも、あはれ深く思ひ知られにし人(＝薫)の御心を、今しもおろかなるべきならねば、かの人(＝大君)も思ひのたまふめるやうに、いにしへの御代りとなすらへきこえて、かう思ひ知りけり、と見えたてまつるふしもあらばや」(早蕨⑤三六九)との思いさえ抱くようになる。

この思いは、前引した総角巻末での薫の思いと同質のものであり、互いを大君の「御代り」としてなずらえていこうという点で共通する。つまり、物語は亡き大君を媒介として薫と中の君との接近を図っているのであり、それはとりもなおさず、両者の間に密通の可能性が浮かび上がってくるということである。

しかし、物語がその方向に展開することはなかった。早蕨巻の薫

を語る際にはしばしば「悔し」「かひなし」の語が用いられるが、薫は中の君への思いを強める一方で、中の君と匂宮を結婚させたことを後悔し、しかし今となってはもはや甲斐のないことと自制するのである。

・心の中には、かく慰めがたき形見にも、げにさてこそ、かやうにもあつかひきこゆべかりけれど、悔しきことやうやうまさりゆけど、今はかひなきものゆゑ、常にかうのみ思はば、あるまじき心もこそ出でくれ、誰がためにもあぢきなくをこがましからむと思ひ離る。
(早蕨⑤三五一)

・(中の君ノ) 所どころ言ひ消ちて、いみじくものあはれと思ひたまへるけはひなど、いとようおほえたまへるを、心からよそのものに見なしつると思ふに、いと悔しく、思ひあたまへれど、かひなければ、その夜のこと、かけても言はず、忘れにけるにやと見ゆるまで、けざやかにもてなしたまへり。
(早蕨⑤三五六)

後見役と懸想人との危うい均衡の上に立つ薫であるが、ここでは「かひなし」という思いが薫の暴走に歯止めをかける仕組みになっている。しかし宿木巻に入り、夕霧の六の君と匂宮の縁談が成立したことにより中の君が苦悩を深めていくと、薫は中の君への同情心を強めていくようになる。「中納言殿も、いといとほしきわざかなと聞きたまふ。花心おはする宮なれば、あはれとは思はずとも、いままめかしき方(＝六の君)にかならず御心移ろひなかし…」(宿木⑤三八六)と、物語は薫の心内を叙述していくのだが、しかしこ

こでは匂宮と中の君を結び付けたことを「かへすがへすぞ悔しき」(宿木⑤三八七)とする思いが記されるものの、薫の思考がそこから「かひなし」に向うことはない。総角巻に「中の君二) かうもの思はせてまつる(＝匂宮とのことで物思いをさせる)よりは、ただうち語らひて、尽きせぬ慰めにも見たてまつり通はましものを(＝夫として通つていけばよかつた)」(総角⑤三三〇～一)と考えていた薫だけに、匂宮との夫婦関係に悩む中の君の噂を聞くと、「かひなし」という自制が働かなくなるということなのであろう。つまり、それだけ薫の心は懸想人の側に傾いていくのである。

この翌朝、自邸の朝顔を手折つた薫は二条邸に中の君を訪ね、「心から、悲しきこと(＝大君との死別)も、をこがましく悔しきもの思ひをも、かたがたに安からず思ひはべるこそいとあいなけれ」(宿木⑤三九四)云々と自らの思いを述べ、「よそへてぞ見るべかりける白露のちぎりかおきし朝顔の花」(宿木⑤三九四～五)との和歌を中の君に詠みかける。この和歌は、中の君の苦悩を前提に、大君から許しを得ていたのだから私こそがあなたの面倒を見るべきでした、と同情を示したものであろう。しかし、これは言うまでもなく、これまでも繰り返されてきた「悔しきもの思ひ」の表明でもあった。それゆえ、薫の気持ちが恋情の告白に傾く可能性が高まる場面なのだが、中の君の返歌を得て「なほいとよく似たまへるものかなと思ふにも、まづぞ悲しき」(宿木⑤三九五)とあるように、今回は大君との死別の悲しみが薫の心中を占めることになる。こうして「悔しきもの思ひ」の暴走を回避した薫は、源氏との別れの悲

しみと比較しながら、「なほ、この近き夢（＝大君との死別）こそ、さますべき方なく思ひたまへらるるは、同じこと、世の常なき悲し、びなれど、罪深き方はまさりてはべるにやと、それさへなん心憂くはべる」（宿木⑤三九六―七七）と訴え、「かたみにいとあはれと思ひかはしたまふ」（宿木⑤三九七）とあるように、大君の死を媒介として中の君と互いに共感しあうのだが、この共感が中の君に宇治行き依頼という更なる提案を促すことに繋がっていく。

数日後、再び薫に宇治行き依頼の手紙を贈った中の君は、総角巻での実事なき一夜を思い出しながら薫と結婚していた可能性を考え、薫を廂の間に招き入れさえる。当の薫も「をりをりは、過ぎにし方の悔しさ、を忘るるをりなく、ものにもがなやととり返さまほしきとほのめかしつつ」（宿木⑤四二二）、「月ごろ、悔しと思ひわたる心の中の苦しきまでなりゆくさまをつくづくと言ひつづけたまひて」（宿木⑤四二八）と、こゝでも後悔の念を表出するのだが、前回とは異なり、中の君の袖を捉えて簾の中にさえ侵入しようとしていく。つまり、今回は「悲しきこと」の方へと話題がそれていかず、薫と中の君が最も接近することになるのであり、密通の可能性が最高潮に達する場面が演出される。しかしながら、そうなる途中の君の方も態度を硬化させる結果となり、結局今回も「男君は、いにしへを悔ゆる心の忍びがたさなどもいとしづめがたかりぬべかめれど、昔だにありがたかりし御心の用意なれば、なほいと思ひのままにももてなしきこえたまはざりけり」（宿木⑤四二九）と、何事もなく退出となるのであった。

右に見てきたように、薫が中の君に接近すべく段階的に状況を敷設してきていながら、何故物語は最後の最後で二人の密通を回避するのか。中の君に迫った際にも薫が「かばかりの対面は、いにしへをも思ひ出でよかし、過ぎにし人（＝大君）の御ゆるしもありしものを」（宿木⑤四二八）と発言しているように、大君の許可を得ているという思いが薫にはあった。それゆえにこそ、匂宮と結び付けたことを「悔し」と後悔するのだが、となれば、早蕨巻のような「かひなし」という思いの消えた宿木巻にあって、薫の行動に歯止めをかけたものはいったい何であったのか。

薫は「いと恥づかしと思したりつる腰のしるしに、多くは心苦しくおぼえてやみぬるかな」（宿木⑤四二九）と今回の一件を振り返るのだが、これを中の君が妊娠していたからとのみ理解するのでは不十分であろう。注目すべきは、宇治行きをめぐる二人の認識の違いである。中の君は「忍びて、渡させたまひてんや」（宿木⑤三九七―八）「いかで忍びて、渡りなむ」（宿木⑤四二二）「いと忍びて、こそよからめ」（宿木⑤四二七）とあるように、あくまでも人目を避けてひっそりと宇治に行くことを望んでいるのに対して、薫は「なほ宮に、ただ心うつしく聞こえさせたまひて、かの御気色に従ひてなんよくはべるべき」（宿木⑤四二五―六）「宇治にいと渡らまほしげに思いためるを、さもや渡しきこえてましなど思へど、まさに、宮は、ゆるしたまひてんや、さりとて、忍びて、はた、いと便なからむ」（宿木⑤四三〇）と発言しまた考えているように、あくまでも匂宮の許可を得て行動に移したいという考えなのである。つまり、

宿木卷の薫からは確かに「かひなし」という思いは消えたものの、匂宮の存在は常に気にかけていたと推測されるのであり、先の「腰のしるし」も中の君の背後に匂宮がいることを再認識させるものであったと捉えるべきであろう。この後「何かは、この宮離れはたまひなば、我を頼もし人にしたまふべきにこそはあめれ」（宿木⑤四三二）と思うのも、この考えの裏返しであり、募ってきた薫の恋情を爆発寸前で思い留まらせたのは、やはり匂宮の存在であったと思われる。

また、このことにかかわって注目しておきたいのが、前引した早蕨巻での「常にかうのみ思はば、あるまじき心もこそ出でくれ」（波線部）という思いである。ここで薫が危惧している「あるまじき心」とは人妻である中の君への恋情のことだが、たとえば源氏や夕霧がそれぞれ藤壺・落葉の宮に対する思いを「あるまじき心」として捉え

・ からうじて鶏の声はるかに聞こゆるに、命をかけて、何の契りにかかる目を見るらむ、わが心ながら、かかる筋におほけなくあるまじき心の報いに、かく来し方行く先の例となりぬべきこととはあるなめり：（夕顔①一六九）

・ (夕霧)「いと、かう、言はむ方なき者に思ほされける身のほどは、たぐひなう恥づかしければ、あるまじき心のつきそめけむも、心地なく悔しうおぼえはべれど、とり返すものならぬ中に、何のたけき御名にかはあらむ。：」（夕霧④四七八〜九）

と、その存在を認めているのに対して、先の薫はその存在自体を打

ち消そうとしている点に注意されるのである。そのような態度は、密通の危険がひとまず回避された後の、中の君への次の発言にも認められる。

・ よろづに思ひたまへわびては、心のひく方の強からぬわざなりければ、すぎがましきやうに思さるらむと恥づかしけれど、あるまじき心のかけてもあるべくはこそめざましからめ、ただかばかりのほどにて、時々思ふことも聞こえさせうけたまはりなどして：（宿木⑤四四七）

ここでも薫は「あるまじき心」の存在を強く否定するのだが、これらの用例からは薫の持つ強い倫理観のようなものが想像されよう。それは密通に対する極度の潔癖性と言い換えてもよいのだが、薫の造型において密通の可能性は既に閉ざされていたのである。

二

言うまでもなく、密通が回避されたからといって薫の恋情が収まったわけではない。しかし、今回の一件を機に中の君が薫ではなく匂宮を選択したことにより、薫がこれ以上中の君に接近していく可能性は断たれることになった。薫を中の君へと近づける際の鍵語であった「悔し」等の語も、前引した「悔ゆる心」を最後として薫の心内からはしばらく姿を消すことになる（次に見られるのは蜻蛉巻）。そしていよいよ浮舟登場となるわけだが、しかし、中の君の口から薫に異母妹（浮舟）の存在が告げられ、宿木巻巻末で薫の垣間見が語られるものの、物語はそこから即座に薫と浮舟の関係成就

へとは向かわず、続く東屋巻では浮舟側の事情を語り始めることになる。

弁の尼經由で薫の意向を知らされた母中将の君であったが、それを本気にせず、浮舟の結婚相手としては身分の釣り合う左近少将と決めるのであった。しかし、浮舟が常陸介の実子でないことを知った左近少将が一方的にこの縁談を破棄すると、中将の君は浮舟の庇護を中の君に求めて二条院に参上することになる。ここで重要なことは、中将の君の考えが一変し、薫と浮舟とを結び付けようとする気持ちに固まることである。

A 乳母ゆくりかに思ひよりて、たびたび言ひしことを、あるまじきことに言ひしかど、この御ありさま（Ⅱ薫）を見るには、天の川を渡りても、かかる彦星の光をこそ待ちつけさせめ、わがむすめは、なのめならん人に見せんは惜しげなるさまを、夷めきたる人をもみ見ならひて、少将をかしこきものに思ひけるを、悔しきまで思ひなりにけり。

（東屋⑥五四）

こうして物語は、薫の側からと同時に浮舟の側からも、二人が結び付くことを既定路線化していくのである。

このようなお膳立てが出来あがったところで、匂宮の侵入事件が語られることになる。結果として事なきを得た浮舟であったが、匂宮に迫られた際には

・扇を持たせながらとらへたまひて、（匂宮）「誰ぞ。名のりこそゆかしけれ」とのたまふに、（浮舟ハ）むくつけくなりぬ。

（東屋⑥六一）

・（匂宮ハ）心づきなげに気色ばみてももてなきねど、（浮舟ガ）ただいみじう死ぬばかり思へるがいとほしければ、情ありてこしらへたまふ。

（東屋⑥六三）

とあるように、相当の恐怖心を抱いたことは間違いない。しかし、同じく夕霧に迫られた落葉の宮が「世を知りたる方の心やすきやうにをりをりほめかすもめざましう、げにたぐひなき身のうさなりやと思しつづけたまふに」（夕霧④四〇八）と感じたり、薫に迫られた大君が「言ふかひなくうしと思ひて泣き給ふ御気色」（総角⑤二三五）を見せたりしたような「うし」の認識をここの浮舟が抱くことはない。それは、浮舟の気持ちに匂宮に傾いていくことと無関係ではあるまい。三条の小家に移された浮舟は、中将の君が匂宮と比較して「この君（Ⅱ薫）は、さすがに、尋ね思す心ばへのありながら、うちつけにも言ひかけたまはず、つれなし顔なるしもこそいたけれ、よろづにつけて思ひ出でらるれば、若き人（Ⅱ浮舟）はまして、かくや（薫ヲ）思ひ出できこえたまふらん」（東屋⑥八一）と考えたのとは対照的に、中の君のことを思い出したことに続けて、先の出来事を

B あやにくだちたまへりし人（Ⅱ匂宮）の御けはひも、さすがに思ひ出でられて、何ごとにかありけむ、いと多くあはれげにのたまひしかな、なごりをかしかりし御移り香も、まだ残りたる心地して、恐ろしかりしも思ひ出でらる。

（東屋⑥八三）

と想起するのだが、「さすがに思ひ出でられて」とされているように、それは浮舟の記憶の底からふっと浮かびあがってくるという体

なのである。この段階ではまだ恐怖心の方が強く匂宮への愛情を自覚するには至っていないようだが、しかし匂宮の声や匂（は）は確実に浮舟の心に浸透していると読み解くべきところなのである。物語は、薰と浮舟とを結び付けようとする周囲の思惑を描き込むと同時に、それと齟齬するような浮舟の情念を始動させていくのである。そして、浮舟巻で薰を装って侵入してきた匂宮と一夜を共にする場面でも、図らずも男と関係をつんだ正篇の女君たちが、その翌朝

身のうさを嘆くにあかで明くる夜はとりかさねてぞ音もなかれ
ける
(帚木①一〇四・空蟬)

世がたりに人や伝へんたぐひなくうき身を醒めぬ夢になしても

(若紫①二二二・藤壺)

うき身世にやがて消えなば尋ねても草の原をば問はじと思ふ

(花宴①三五七・朧月夜)

あけぐれの空にうき身は消えなむ夢なりけりと見てもやむべく
く
(若葉下④二二九・女三の宮)

と和歌に詠んでいるのは対照的に、匂宮の情熱的な対応に接して、
C女、いとさまよう心にくき人(=薰)を見ならひたるに、時の
間も見ざらむに死ぬべしと思し焦がる人(=匂宮)を、心ざ
し深しとはかかるを言ふにやあらむと思ひ知らるるにも、あや
しかりける身かな、誰も、ものの聞こえあらば、いかに思さむ
と、まづかの上(=中の君)の御心を思ひ出できこゆれど：

(浮舟⑥一三〇)

と思うのであった。

こうして浮舟は、薰と結ばれるべく周囲の環境が整っていく中で、匂宮に心惹かれていくようになる。しかし、そのことが浮舟を苦しめなはずはない。匂宮に浮舟が迫られたことを知った中將の君は「便なきことも出で来なば人笑へなるべし」(⑥東屋七七)と言いついていたが、匂宮との愛に生きることはまさに「人笑へ」を招来する行為にほかならず、浮舟は周囲の期待(薰)と自身の恋情(匂宮)との間で苦悩を深めていくことになる。実は浮舟が「うし」の認識を抱くのは、そのような時であった。匂宮との逢瀬があった後、薰が宇治を訪れた際に、浮舟は「女、いかで見えたまつらむとすらんと、空さへ恥づかしく恐ろしきに、あながちなりし人(=匂宮)の御ありさまうち思ひ出でらるるに、またこの人(=薰)に見えたまつらむを思ひやるなん、いみじう心憂き」(浮舟⑥一四二)と思いつつも薰と対面するのだが、そこに

D男は、過ぎにし方のあはれをも思し出で、女は、今より添ひたる身のうさを嘆き加へて、かたみにもの思はし。

(浮舟⑥一四五)

とあるのが初出である。これ以降、

・：はじめより契りたまひしさまも、さすがにかれ(=薰)はなほいともの深う人柄のめでたきなども、世の中を知りにしはじめなればにや。かかるうきこと聞きつけて思ひ疎みたまひなむ世には、いかでかあらむ、いつしかと思ひまどふ親にも、思はずに心づきなしとこそはもてわづらはれめ：

(浮舟⑥一五七〜八)

・君は、さてもわが身行く方も知らずなりなば、誰も誰も、あへなくいみじとしばしこそ思うたまはめ、ながらへて人笑へにうきこともあらむは、いつかそのもの思ひの絶えむとする、と思ひかくるには：

(浮舟⑥一六八)

・まろは、いかで死なばや、世づかず心憂かりける身かな、かくうきことあるためしは下衆などの中にだに多くやはあなる、とて、うつぶし臥したまへば：

(浮舟⑥一八一)

と繰り返されていくのだが、右の用例にも明らかのように、浮舟が抱く「うし」の感情は、他の女君たちとは異なり、男に迫られたこととそれ自体にはなく、匂宮と薫の間で板挟みになっているという状況にこそ由因するのである。

このように物語は、思い乱れる浮舟の姿を描き込んでいくのだが、薫がそれに気づくことはない。浮舟に「思ひ乱る」という語が初めて使われるのは「うし」の初例と同じ時だが、そこに

E あやしう、うつし心もなく思し焦らる人（＝匂宮）をあはれと思ふも、それはいとあるまじく軽きことぞかし。この人（＝

薫）にうしと思はれて、忘れたまひなむ心細さは、いと深うしみにければ、思ひ乱れたる気色を、（薫ハ）月ごろに、こよなうもの心の思ひ知りねびまさらにけり、つれづれなる住み処のほどに、思ひ残すことはあらかしと見たまふも、心苦しければ、常よりも心とどめて語らひたまふ。（浮舟⑥一四三〜四）

とあるように、薫は浮舟の内面にまったく考え及ばないのである。それどころか、匂宮と浮舟との秘密を知った薫は、浮舟と関係を

持った匂宮について「さても、知らぬあたりにこそ、さるすき事をものたまはめ、昔より隔てなくて、あやしきまでしるべして率て歩きたてまつりし身にしも、うしろめたく思しよるべしや」（浮舟⑥一七四）と思ひ、浮舟のことについて

(一七四)

F 女のいたくもの思ひたるさまなりしも、片はし心得そめたまひては、よろづ思しあはするに、いとうし。ありがたきものは、

人の心にもあるかな、らうたげにおほどかなりとは見えながら、色めきたる方は添ひたる人ぞかし、この宮の御具にてはいとよきあはひなり：

(浮舟⑥一七五)

と理解するのであった。

そのような薫の思考において注目すべきは、匂宮との対比からかつての自身と中の君との関係を振り返り「対の御方（＝中の君）の御事を、いみじく思ひつつ年ごろ過ぐすは、わが心の重さこよなかりけり、さるは、それは、今はじめてさまあしかるべきほどにもあらず、もとよりのたよりにもよれるを、ただ心の中の隈あらんがわがためにも苦しかるべきによりこそ思ひ憚るもこなるわざなりけれ」（浮舟⑥一七四）と考えている点である。前節末で述べたように「あるまじき心」の存在を強く否定する薫であるだけに、自分との関係を知りながら浮舟に手を出した匂宮が許せないであろうし、そのような匂宮を受け入れる浮舟の心理もまた理解できないということなのである。「波こゆるころとも知らず末の松待つらむとのみ思ひけるかな／人に笑はせたまふな」（浮舟⑥一七六〜七）という難詰の和歌と言葉を浮舟に贈るのも、それゆえのことだと思われる

る。

こうして、追いつめられた浮舟は

Gながらへばかならずうきこと見えぬべき身の、亡くならんは何
か惜しがるべき、親もしばしこそ嘆きまどひたまはめ、あまた
の子どもあつかひに、おのづから忘れ草摘みてん、ありながら
もてそこなひ、人笑へなるさまにてさすらへむは、まさるもの
思ひなるべし。

(浮舟⑥一八四〜五)

などと考えて、ついに自死を決意するのだが、はたして薫と浮舟と
はこのまますれ違いに終わってしまうのか。

三

浮舟を失った薫は、

・心憂かりける所かな、鬼などや住むらむ、などで、今までさる
所に据ゑたりつらむ、思はずなる筋の紛れあるやうなりしも、
かく放ちおきたるに心やすくて、人も言ひ犯したまふなりけむ
かし、と思ふにも、わがたゆく世づかぬ心のみ悔しく、御むね
いたくおぼえたまふ。

(蜻蛉⑥二一五)

・宮をめづらしくあはれと思ひきこえても、わが方をさすがにお
ろかに思はざりけるほどに、いとあきらむるところなく、はか
なげなりし心にて、この水の近きをたよりにて、思ひ寄るなり
けんかし、わがここにさし放ち据ゑざらましかば、いみじくう
き世に経とも、いかでかかならず深き谷をも求め出でまし、と
いみじううき水の契りかなと、この川の疎ましう思さるること

いと深し。

(蜻蛉⑥二三五)

と、自分自身の側に死の原因を求めていくようになり、その思いは
やがて「ただ、わが過ちに失ひつる人なり」(蜻蛉⑥二二六)「わが
過ちにて失ひつる」(蜻蛉⑥二四三)という認識へと収斂していく
ことになる。薫が「わが過ち」と捉えるのは、他に二例ありいずれ
も匂宮と中の君を結び付けたことを指している(総角⑤二八五・宿
木⑤四五四)。このことが「悔し」の念に結び付くことは前述の通
りだが、ここでもまた「とく迎へとりたまはずなりにけること悔し
う」(蜻蛉⑥二三七)などとあるように、後悔の念に繋がっていく
ことになる。そして、浮舟の四十九日を終えた薫は半生を回顧しつ
つ、「思ひもていけば、宮をも思ひきこえじ、女(＝浮舟)をもう
しと思はじ、ただわがありさまの世づかぬ怠りぞ」(蜻蛉⑥二六
一)との考えに至るのである。⁶⁾この「女をもうしと思はじ」という
思いは、前掲Eの「この人にうしと思はれて、忘れたまひなむ心細
さは、いと深うしみにければ」という浮舟の危惧と響き合っているよ
う。薫の預かり知らぬことではあるが、薫と浮舟とが繋がりが得る可
能性を物語は暗示しているのだと思われる。

しかし、右のような考えを抱いたからといって、匂宮や浮舟のこ
とを完全に許せたわけではないらしい。薫は、女房と戯れる匂宮を
見て「いかで、このわたりにも、めづらしからむ人の、例の心入れ
て騒ぎたまはんを語らひ取りて、わが思ひしやうに、やすからずと
だにも思はせたまつらん」(蜻蛉⑥二七〇)と思っているし、ま
た召人である小宰相の君を「見し人(＝浮舟)よりも、これは心に

くき気添ひてもあるかな」(蜻蛉⑥二四六)と評価する背景にも、彼女が匂宮の懸想をきつぱりとはねつけたことを「まめ人(薫)は、すこし人よりことなりと思すにんありける」(蜻蛉⑥二四五)ということが影響している。手習巻や夢浮橋巻の巻末でも、それぞれ「さすがに、その人とは見つけながら、あやしきさまに、容貌ことなる人の中にて、うき、ことを聞きついたらんこそいみじかるべけれ」(手習⑥三六八〜九)「人の隠しすゑたるにやあらん」(夢浮橋⑥三九五)と、浮舟が他の男にかくまわれている可能性に思い至るように、浮舟を軽侮する心は相当に根深いようである。

とはいえ、浮舟への思いを断ち切れないのが薫という人物でもあった。四十九日が終わると物語は宮廷社会を舞台とするようになる。この蜻蛉巻後半の位置付けをめぐっては、様々に議論が展開されてきたが、注目すべきは、やはり薫の新たな恋の展開の芽がことごとく摘まれていることである。たとえば、先に見た小宰相の君にしても、浮舟以上との評価を与えられながらも「さま」などかく出で立ちけん、さるものにて、我も置いたらまし、を」(蜻蛉⑥二四六)との感想が記されているように、宮仕えした今となっては召人以上の扱いはあり得ないのである。とすれば、かつて薫との縁談話を持ち上がった宮の君にしても、小宰相の君同様、もはや薫の恋の相手にはなり得まい。宮の君の声を聞いての「ただ、なべてのかかる住み処の人と思はば、いとをかしかるべきを、ただ今は、いかで、かばかりも、人に声聞かすべきものならひたまひけんとなまうしろめたし」(蜻蛉⑥二七四)という感想も、「式部卿宮

の姫君として宮の君を恋慕う気持ち、が萎えてきていることをうかがわせる」(鑑賞と基礎知識)ということだと思われる。そして言うまでもなく、女一の宮もまた手の届かない対象なのであり、妻として迎えた女二の宮は彼女に似るべくもないのであった。

こうして、薫の思考は宇治の姫君たちへと回帰していくことになる。蜻蛉巻は

日あやしかりけることは、さる聖の御あたりに、山のふところより出で来たる人々の、かたはなるはなかりけるこそ、この、はかなしや、軽々しやなど思ひなす人も、かやうのうち見る気色は、いみじうこそをかしかりしか、と何ごとにつけても、ただかの一つゆかりをぞ思ひ出でたまひける。あやしうつらかりける契りどもを、つくづくと思ひつづけながめたまふ夕暮、蜻蛉のものはかなげに飛びちがふを、

「ありと見て手にはとられず見ればまた行く方もしらず消えしかげろふ

あるかなきかの」と、例の、独りごちたまふとかや。

(蜻蛉⑥二七五〜六)

と閉じられることになるのだが、このような薫にもはや自己救済はあり得まい。薫は早くから仏道を志しており、大君や浮舟の死に接して「まことに世の中を思ひ棄てはつるしるべならば、恐ろしげにうきことの、悲しさもさめぬべきふしをだに見つけさせたまへ」(総角⑤三三九)と仏に祈ったり「人の心を起こさせむとて、仏のしたまふ方便は、慈悲をも隠して、かやうにこそはあなれ」(蜻蛉

⑥(二一六)と考えたりしていたが、遂に薫が出家へと踏み切ることはなかった。むしろ、深い迷妄の闇へとますます彷徨い込んでいく趣なのである。

四

一方の浮舟は、小野で蘇生した後、

・「世の中になほありけりといかで人に知られじ。聞きつくる人もあらば、いといみじくこそ」とて泣いたまふ。

(手習⑥二九九)

・かやうの人につけて、見しわたりに行き通ひ、おのづから世にありけりと、誰にも誰にも聞かれたてまつらむこと、いみじく恥づかしかるべし。

(手習⑥三〇三)

・限りなくうき身なりけりと見はててし命さへ、あさましう長くて、いかなるさまにさすらふべきならむ、ひたぶるに亡きものと人に見聞き棄てられてもやみなばやと思ひ臥したまへるに：

(手習⑥三一七)

などと繰り返し記されるように、人々に自らの存在を知られたいくないとの思いを強くしていた。とりわけ、後掲するように、薫に知られることを極端に恐れているのだが、このことは前掲Eや「わが心も、瑕ありてかの人(＝薫)に疎まれたてまつらむ、なほいみじかるべしと思ひ乱るるをりしも…」(浮舟⑥一五八)と、薫に捨てられることを心配していた浮舟巻のありようとは大きく異なっている。

それは、浮舟が男性とかかわりを持って生きることそのものを回

避しようとしていることと無関係ではない。蘇生した浮舟は

I今は限りと思ひはてしてしほどは、恋しき人多かりしかど、こと人々はさしも思ひ出でられず、ただ、親いかにまどひたまひけん…
(手習⑥三〇三)

と、入水直前とは異なり、匂宮や薫のことなどを思い出したりはしなくなっている。しかし、浮舟が過去の経験を完全に清算できているわけではない。

Jやうやう身のうさをも慰めつべききはめに、あさましうもてそこなひたる身を思ひもてゆけば、宮を、すこしもあはれと思ひきこえけん心ぞいとけしからぬ、ただ、この人の御ゆかりにさすらへぬるぞと思へば、小島の色を例に契りたまひしを、などをかしと思ひきこえけん、とこよなく飽きにたる心地す。はじめより、薄きながらもどやかにものしたまひし人は、このをりかのをりなど、思ひ出づるぞこよなかりける。かくてこそありけれと聞きつけられたてまつらむ恥づかしさは、人よりまさりぬべし。さすがに、この世には、ありし御さまを、よそながらだに、いつかは見んずるとうち思ふ、なほわろの心や、かくだに思はじ、など心ひとつをかへさふ。(手習⑥三三一～三二二)

右は出家直前の浮舟の心内だが、まず注目すべきは傍線部で、浮舟は今回の一件を匂宮に惹かれた自分自身の心に由因するものとして捉えている。これは「わが心もてありそめしことならねども」(浮舟⑥一七八)という捉え方とは正反対であり、たとえ匂宮がきっかけをつくったとはいえ、それに惹かれてしまった自らを反省してい

るのである。この思いは翌年春の

K春のしるしも見えず、凍りわたれる水の音せぬさへ心細くて、
「君にぞまどふ」とのたまひし人（＝匂宮）は、心憂しと思ひ
はて、にたれど、なほそのをりのことは忘れず：
（手習⑥三五四～五）

という思いにも通じていく。匂宮への恋情は消え去り、思い出だけが残るといふことなのだと思う。とすれば、議論の多い「袖ふれし人こそ見えね花の香のそれかとにほふ春のあけぼの」（手習⑥三五六）の「袖ふれし人」も匂宮と考えるべきではないか。眼前の紅梅の香りから浮舟は匂宮との官能の日々を思い出しはいるのだが、しかしそれは未練や執着といったものではなく、そのように捉え直すことを通して、匂宮との関係が過去のものとなっていくという結構なのだと考える。

問題はむしろ薫との関係で、波線を付したように薫には自分の存在を知られたくないと思う一方で、よそながらでもその姿を拝見したいとの思いも去来するというのである。浮舟自身が「なほわろの心や」と自覚するように、薫への思いは完全には断ち切れていない。それは、薫が自分のことを忘れていないことを知らされた際の「忘れたまはぬにこそとはあはれに思ふにも」（手習⑥三六〇）という反応に端的であり、言ってみれば、そういう「なほわろの心」を抱えたままで、浮舟は薫との関係を断ち切ろうとしているのである。とすれば、薫に対して浮舟の心は揺れざるを得まい。知られるように、物語は、そのような浮舟が薫に存在を知られる方向へと展開し

ていくのだが、いったい二人の再会はどういう可能性を孕んだものとして描き出されてくるのか。それは『源氏物語』の結末をどのようなものとして把握するのかということでもあるが、この問題を考える前に、手習巻に描かれる中将をめぐる挿話の意味を考えておく必要がある。

その際重要な指針となるのが、原岡文字子氏の論である⁽⁸⁾。周知の通り、原岡氏は、中将の懸想が浮舟を出家へと導く機能を有していると同時に、その描かれ方においてこれまで絶対的な位置を占めてきた「あはれ」の世界が相対化されていることに注目した。この「あはれの相対化」という視点がここでは有効であろう。妹尼や中将がそれぞれ「かかる御住まひは、すずろなることも、あはれ知るこそ世の常のことなれ」（手習⑥三二五）、「山里の秋の夜ふかきあはれをももの思ふ人は思ひこそ知れ」（手習⑥三二八）などと浮舟に働きかけるものの、浮舟はいっこうに「あはれ」の世界に対して心を開こうとはしない。そして、前掲Jのように「宮を、すこしもあはれと思ひきこえけん心ぞいとけしからぬ」と考えるのである。かつて浮舟は「女も、限りなくあはれと思ひけり」（浮舟⑥一三三〇）「かたみにあはれとのみ深く思しまさる」（浮舟⑥一三五）などであるごとく匂宮に感溺していたのだが、それへの反省が「あはれ」の世界に再び下り立つことを峻拒させるのだと思われる。とすれば物語は、自らを取り巻く周囲の自然や人物に対して「あはれ」の情を抱いた蘇生後の紫の上とは異なる人生を浮舟に用意しているということになる。そのことを薫との問題に引き絞って言えば、もはや薫との

間に「あはれ」を媒介とした関係は構築し得ないということになる。確かに、前述の通り、浮舟は自らを忘れていなかった薫に対して「あはれ」の情を抱いてはいた。しかしながら、小野を訪れた薫を見た際に「月日の過ぎゆくまに、昔のここのかく思ひ忘れぬも、今は何にすべきことぞと心憂ければ、阿弥陀仏に思ひ紛らはして、いとどものも言はでゐたり」(夢浮橋⑥三八三)とあるように、そういう共感の情そのものを封じ込めようとしているのである。

五

それでは、薫と浮舟の再会を通して、物語はどのような男女関係を描き出そうとしたのか。この問題について考える際に注目すべきは、やはり横川僧都の手紙であろう。薫の来訪を受け、浮舟との関係を知った僧都は、簡単に浮舟を出家させた自らの落ち度を認めながらも、浮舟に還俗を勧奨する。

し今朝、ここに、大将殿のものしたまひて、御ありさま尋ね問ひたまふに、はじめよりありしやうくはしく聞こえはべりぬ。御心ざし深かりける御仲を背きたまひて、あやしき山がつつの中に出家したまへること、かへりては、私の責めそふべきことなるをなん、うけたまはり驚きはべる。いかがはせん。もとの御契り過ちたまはで、愛執の罪をはるかしきこえたまひて、一日の出家の功德ははかりなきものなれば、なほ頼ませたまへとなん。ことごとには、みづからさぶらひて申しはべらむ。かつがつこの小君聞こえたまひてん。(夢浮橋⑥三八六―七)

「いかがはせん」とも述べているように、この還俗勧奨は窮余の策ではあるのだが、しかし薫と浮舟の双方にとって利とするところの大きい提案であったように思う。第三節で述べたように、恋の不如意を抱え込む薫は、深い迷妄の間を彷徨っている。それを僧都は「愛執の罪」と喝破するのだが、これが第二部以降明瞭になつてきた男の執着という問題を襲うものであることは言うまでもない。横川僧都は、浮舟に執着するあまり抱え込むことになつた薫の罪を晴らすべく、浮舟に還俗を求めているのである。それはとりもなおさず、薫の救済を意図したものであった。

では、当の浮舟は薫救済のための捨て石に過ぎないのかと言えば、そうではあるまい。浮舟に対して、「思ひたちて、心を起こしたまふほどは強く思せど、年月経れば、女の御身といふもの、いとたいだいしきものになん」(手習⑥三三五)「なにがしはべらん限りは仕うまつりなん。何か思しわづらふべき」(手習⑤三四八)と発言していたように、僧都は常に浮舟の出家生活の行く末を心配していた。具体的には、若い女性の出家であるだけに、男性からの誘惑に負け不淫戒を犯してしまうのではないかと不安、及び自分たちが生きていく間はよいが死後の経済的物質的な援助をどう確保するのかという問題である⁽⁹⁾。還俗して薫との生活に戻るとは、そのような心配を解消することにもなる。また、「なほ頼ませたまへ」と述べているように、還俗したからといって仏の加護が断ち切られるわけでもない。つまり、浮舟の救済もまた可能だというのである。

このことを、宇治十帖の問題として捉え直せば以下のようになる。

道心と恋心の対立を抱えた薫の人物造型は、光源氏晩年の問題を引き継いだものでもあった。⁽¹⁰⁾ それゆえ、薫の救済という問題が一方には見据えられていたと想像されるが、むしろ物語は、そのような薫を恋の妄執へと迷い込ませるべくここまで操作してきていた。薫が浮舟に宛てた物語の最終歌「法の師とたづぬる道をしるべにて思はぬ山にふみまど、ふかな」(夢浮橋⑥三九二)は、まさにそのような宇治十帖において描き出されてきた薫の半生を凝縮したような内容になっていると考えられるが、物語はそのような薫の(まどひ)を最後に強調して物語を締めくくるのである。それゆえ、もはや薫は物語の主題を担い得ないとも考えられるが、物語としては、むしろそのような薫が救われる道をここに用意したということなのではないか。

しかし、救われようとしているのは薫だけではない。第二部での紫の上の苦悩を引き継いだ大君や浮舟によって宇治十帖の主題が深化されてきたと見る立場に立てば、男性を拒否して出家を果たした浮舟を再び還俗させることは、主題の後退とも評されかねない。しかし、藤壺や六条御息所の死後のありようを見ても明らかのように、この物語は出家が即救済を意味すると考えていたわけではない。それゆえ、浮舟が出家したところで問題が解決されるのではなく、その後の救済にまで右の主題は射程を広げていたはずである。一方的に男の執着を断ち切るだけで女は彼岸に到達できるのか。賢木巻で源氏が藤壺に訴えかけた「逢ふことのかたきを今日にかざらずはいまいく世をか嘆きつつ経ん／御絆にもこそ」(賢木②一一二)とい

う言葉を参考にすると、薫を迷妄の闇に彷徨させたまま浮舟が出家生活を続けたとしても、薫の執着が浮舟の往生を妨げないとも限らない。それゆえ、浮舟が救われるためにも、薫の愛執を断ち切っておくのは必要なことであつた。⁽¹¹⁾

このように、第二部の光源氏と紫の上をそれぞれ受け継ぐものとして、薫と浮舟を捉えたとすれば、薫と浮舟の関係もまた光源氏と紫の上のそれを踏まえたものということになる。知られるように、第二部の紫の上は、自身への執着ゆえに出家を許そうとしない光源氏を「あはれ」と見詰め受け止めていた。本論は晩年の紫の上が辿りついたそのような境地を高く評価したいと思うが、物語は宇治十帖を書き進めるにあたり、そのような源氏と紫の上の関係を仏教的な側面から乗り越えようとしたのではないか。浮舟を軽侮しつつも忘れられない薫と、「なほわろの心」を抱えたまま薫を忘れようとしている浮舟、この二人を「あはれ」による共感ではなく結び付け、ともに救済しようとするところに、横川僧都の還俗勸奨が要請されたのだと考えたい。

とはいえ、浮舟がこの申し出を承引するのは容易なことではない。はたして、僧都は浮舟にどのような生活を勧めようというのか。また、その説得に浮舟は応じることができるのか。あるいは、大君思慕を原点とする薫の執着は浮舟との生活で癒されることができるのか。物語は、今後の具体的な展開をすべて読者の想像力に委ねたところで筆を擱いてしまう。恋する人間は救われるのか——源氏物語は恋の妄執に取りつかれた男女の苦悩を様々に描き出してきた

が、ついにその救済を描くことはなかった。おそらくそれは、中世の恋愛文学へと引き継がれていく課題なのであった。

注1 伊藤博「愛執の薫」(源氏物語の基底と創造) 武蔵野書院一九九四年。

2 このあたりの分析については、中川照正「宇治十帖における薫の主題」(源氏物語研究集成) 第二巻、風間書房一九九九年。参照。また、宿木巻における「悔し」については、鈴木俊光「源氏物語」宿木巻の薫の思い—中の君への「悔し」を中心に—(『論輯』駒澤大学大学院、二〇〇七年三月)参照。

3 このことを別に視点から捉えれば、薫の執着は柏木のそのように決して暴走していかないということになる。しかしそのことは、宇治十帖において男の執着が重要視されなくなっただけということではあるまい。第一部や第二部において繰り返された、執着の発現たる密通の物語ではなく、むしろその救済が宇治十帖では目指されているのだと思われる。

4 鈴木裕子「中将の君と浮舟」縛る母・「反逆」する娘」(源氏物語)を(母と子)から読み解く』角川書店二〇〇五年)は、この時浮舟が抱いた恐ろしさについて「この恐ろしさは、命の危険にさらされたような鋭い恐怖感ではなく、それまで経験したことのない、官能を揺るがす不気味さともいうものであろう」と指摘する。

5 横山由美子「浮舟・さすらいの物語空間」(『玉藻』一九九〇年三月)参照。

6 この「宮」を女一の宮と解する説もあるが、匂宮とする通説に従った。

7 当該歌の解釈については、金秀姫「浮舟物語における嗅覚表現—袖ふれし人」をめぐる—(『国語と国文学』二〇〇一年一月)藤原克己「袖ふれし人」は薫か匂宮か—手習巻の浮舟の歌をめぐる—(『源氏物語と和歌世界』新典社二〇〇六年)参照。

8 原岡文子「あはれ」の世界の相対化と浮舟の物語」(『源氏物語の人物と表現』翰林書房二〇〇三年)。

9 今井久代「浮舟の出家—「我」と「君」^{あなた}のはざままで—」(『王朝文学

と仏教・神道・陰陽道』竹林舎二〇〇七年)など参照。

10 岡崎義恵「光源氏の道心」(『源氏物語の美』岡崎義恵著作集5、宝文館一九六二年)鈴木日出男「物語主人公としての薫」(『源氏物語虚構論』東京大学出版会二〇〇三年)藤井貞和「思ひ寄らぬ隈なき」薫」(『源氏物語論』岩波書店二〇〇〇年)など参照。

11 今井上「踏み惑う薫と夢浮橋—宇治十帖の終末についての試論—」(『源氏物語 表現の理路』笠間書院二〇〇八年)参照。

12 丸山キヨ子「横川の僧都」(『源氏物語の仏教』創文社一九八五年)など参照。

*本文の引用は、新編日本古典文学全集(小学館)に拠った。

(よしだ・みきお 本学准教授)